教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和　4年　3月　29日

氏　名　久島　裕介

所　属　基礎教育学　コース

学籍番号　23-217006

指導教員名　小国　喜弘

1．研究課題　生活に埋めこまれた「差別」に向き合う教育の分析-水俣北公害研究サークルに焦点を当てて-

2．報告する学術活動の実施期間　令和　4年　3月　14日　～　令和　4年　3月　18日

3．日本学術振興会特別研究員（DC）の現在の採用状況　□DC1　□DC2　□採用無し

4．学術活動

□国外　□国内
□①英語論文公表
□②研究科教員の研究プロジェクト参加
□③フィールドワーク
☑④国際会議（☑研究発表　□運営補助　□出席のみ）
□⑤研究会（□研究発表　□運営補助　□出席のみ）
□⑥研究指導委託
□⑦留学
□⑧国際研修
□⑨国際インターンシップ
□⑩その他（具体的に：　　）

5．　学術活動実施の概要

※上記４で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

① 英語論文公表
（著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要）
② 研究科教員の研究プロジェクト参加
（プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間（年月日）及び活動頻度、プロジェクトの概要）
③ フィールドワーク
（調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間（年月日）及び活動頻度、調査先の概要）
④ 国際会議
（研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式（口頭・ポスター等）、発表年月日、発表内容等の概要）
⑤ 研究会
（研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式（口頭・ポスター等）、発表年月日、発表内容等の概要）
⑥ 研究指導委託
（派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間（年月日）、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要）
⑦ 留学
（派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間（年月日）、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要）
⑧ 国際研修
（プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間（年月日）、プログラム概要、研究発表内容等の概要）
⑨ 国際インターンシップ
（プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間（年月日）、具体的な活動、プログラム内容等の概要）
⑩ その他（具体的な活動、活動期間（年月日）及び活動頻度等の概要）

学術活動区分 （①～⑩を記入）	④

形式：研究発表
学会・会議名：11th World Environmental Education Congress（世界環境学会第 11 回大会）
国名・都市名：プラハ（オンライン）
発表題目名：ANALYSIS OF ENVIRONMENTAL EDUCATION PRACTICES ABOUT MINAMATA DISEASE: FOCUS ON MINAMATA ASHIKITA ENVIRONMENTAL POLLUTION STUDY CIRCLE
発表形式：ポスター
発表予定年月日：2022 年 3 月 14 日～3 月 18 日
発表内容等の概要：

2015 年に国連で持続可能な開発目標（SDGs）が採択された。これらは、貧困や社会的排除の問題に対処するための人権アプローチと、地球環境の問題に対処するための自然生存権アプローチに基づいている。こうした状況を背景に、今日の日本においては人権教育や環境教育と呼ばれる多くの教育活動が行われている。

しかし、このように人権教育と環境教育に二分された形で取り組まれることに関して、水俣病問題に取り組み続けていた教師たちは懸念を示していた。例えば、田中睦は、環境教育は「環境美化」ではなく、「差別、人権、そして生命」を基軸に据えたものでなければならないと主張している。このような水俣の教師たちの教育論を培ったのは、1976 年に水俣の教師たちによって結成された水俣芦北公害研究サークルにおける研究活動であった。

そこで本研究では、水俣芦北公害研究サークルにおける研究活動に着目し、そこで教師たちが構築した教育論の内実とその形成過程、そしてそれを体現する実践的技法を明らかにする。

（注）① 年月日は西暦で記入してください。
② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2 つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6．　学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本学術活動の目的は、1970年代における水俣芦北公害研究サークルにおける研究活動に着目し、そこで教師たちが構築した教育論の内実とその形成過程、そしてそれを体現する実践的技法を明らかにすること、その成果を国際学会の場で発表することであった。

日本においては、1960年代から1970年代にかけて激しく展開された公害に対する反対運動を背景に、1960年代半ばから各地の学校教育で公害教育が実施された。こうした公害教育運動は、国際的に見ても特徴的な運動であったことが指摘されている[1]。そこで実践された公害教育は、次のような性格を有していた[2]。第一に、公害教育における主張は1997年のテサロニキ宣言に述べられた持続社会の要件に重なるところが多く、環境と持続可能性のための教育の考え方を先取りするものであった。第二に、日本の公害教育は自然環境と人の破壊という激しい環境問題に異議を唱え、真実を知らせ被害者の人格を支えるという側面を有していた。安藤聡彦は、公害教育運動が全体としてこうした性格を有していたことを踏まえつつ、「公害教育運動は多様なもの」であり、「それらによって担われた価値も複数」存在していたがゆえに、個別の公害教育実践に着目して検討することの必要性を指摘している[3]。

これらを踏まえ本学術活動では、公害教育運動の中で生起した個別の公害教育実践に着目し、そこで担われていた価値を明らかにすることを課題とした。そこで本学術活動では、熊本県の水俣芦北地区で水俣病についての研究と実践を重ねてきた教師たちが1976年に組織した水俣芦北公害研究サークルを対象とした。水俣芦北公害研究サークルの教師たちは、A先生はBさんと関係が深く、C先生はDさんと関係が深い、というように、ひとりひとりが個別の水俣病患者との関係を取り結んでいた。こうした水俣病患者との交流を通して学んだことがサークルの中で共有され、教育実践が紡ぎ出されていった点に特徴がある。

こうした水俣芦北公害研究サークルにおける公害教育実践の検討の結果として以下のような成果を得ることができた。①サークルの教師たちは、教師自身・子どもが水俣病に関する「差別」の二重の意味での当事者（被害者・加害者）であるという問題意識を有していた。②こうした問題意識から教師が作った教材、行った授業は、教師が科学的な研究、患者との交流から学んだことを追体験させるものであったと位置づけられる。そしてその教材・授業は、水俣病についての科学的な認識を伝える、患者の苦しみ・いたみに迫らせる、という両輪で構成されていた。③80年代以降、全国的な傾向として公害学習の環境教育化が進行する中でも、サークルにおいては、患者さんから学ぶという営みを通してサークルでの協力のもと、公害教育が続けられていた。④そこで教師たちは、患者さんから話を聴く中で、事実を理解しつつ、vulnerability の価値観の転換が生じ、生き方を出会わせ、内なる差別と外なる差別に対抗し、自分の受ける差別と闘うという営みが行われていた。そしてそこでは、必然的に教師の1人称の語りも生起していた。

以上のような成果は、「戦後日本の地域教育サークルの歴史」を明らかにしようとする自身の研究課題にも示唆的なものであった。高度経済成長が終焉に向かっていく1970年代において、各地の地域教育サークルにおいては、「地域に根ざす教育」が重視され、そこでは近代的諸価値を問い直すような教育実践が展開された。本学術活動が対象とする水俣芦北公害研究サークルは、こうした1970年代の地域教育サークルの代表的な事例として位置づけることができるだろう。

---

[1] 例えば、1975年に京都で開催された国際人間環境会議において、イギリスの核物理学者であるバーロップが、は「日本の環境教育」が「環境破壊に抗する教育、すなわち公害教育として出発」したことを驚きをもって受け止めていたと記述している（福島要一「環境教育前史」、福島要一編『環境教育の理論と実践』、あゆみ出版、1985年、41頁）。

[2] 東京学芸大学環境教育実践施設編『日本の環境教育概説』、2005年、1-2頁。

[3] 安藤聡彦「序章　本共同研究の課題と枠組」『公害教育運動の基礎的研究』、2012年、9-10頁。